

JET からの手紙

国際交流とボランティアで地域に貢献

福井県 外国語指導助手

Natasha Taliferro (ナターシャ・タリフェロ)

はじめに

私と日本との縁は JET プログラムに参加する前から始まっていました。私は多くのアメリカ人と同じように、幼い頃にアニメや漫画、ゲームなどで日本のことを知りました。しかし、それがきっかけで日本に興味を持ったわけではありません。実は、宇多田ヒカルさんの「光」という曲がきっかけでした。私が 13 歳の時に CM で流れていたこの曲を聴いた時、日本語を勉強したいという思いが芽生えたのです。その曲を聴いた瞬間に私の運命が決まりました。

大学 4 年生になった時、外交官、分析者、研究者など、どんな仕事に就こうか迷いましたが、日本語を使う仕事に就きたいという強い思いがあったため、日本とアメリカの架け橋になるような仕事をしたいと思うようになりました。

そんなある日、キャリアフェアで JET プログラムのブースを見かけて、JET プログラムに興味を持ち、JET プログラムに応募したのです。

福井県ってどこ?!

応募した時は、東京で働きたいと思っていました。東京の大学に留学したことがありまして、東京には友達がたくさんいました。留学した時のような生活を続けられたらいいなと思っていたのです。しかし、行き先は東京ではなく、福井県でした。最初、「福井県? 福井県ってどこ?」と不安もありましたが、新天地でチャレンジして頑張ろうと決めました。

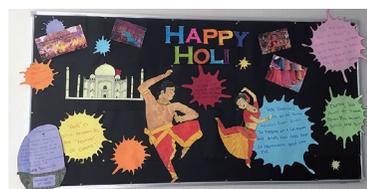
福井県に来てすぐに、悩みが消えました。私が抱いていた印象とは違い、福井県はただの田舎の県ではありませんでした。福井県の生徒たちはいつも「福井は自然が

オススメ」と言っていますが、私にとっての福井県の良さは、地域の人々の優しさで寛容さでした。そのおかげで福井県での生活が大好きになりました。

教えるのは初めて

4 年前の暑い夏の日、初めて成和中学校へ行き、先生方と会いました。ついに、私が日本の学校で教職員チームの一員になったのです。でも、本当に頑張らないといけないのは学校が始まってからでした。教師の経験がなく、22 歳になったばかりの私にとって、生徒たちと絆を深めるのは簡単ではありませんでした。もちろん今でも、新入生と絆を深めていくことなどは簡単ではありません。しかし、今思い返してみても、最初の年はうまくいかないことも多く、とても強く印象に残っています。あの時と比べると、自分は随分成長したと思います。

福井県で、2 つの公立中学校で 10 人の日本人の英語の先生と一緒に、約 700 人以上の生徒に英語を教えています。その 2 つの中学校で各生徒たちの英語力は違いますが、私の目標は同じです。それは、「生徒の英語力と自信を向上させること」です。授業では、外国語指導助手 (ALT) として、英語を教えたり、外国の文化を教えたりします。生徒たちにとって外国の文化に触れることはとても重要だと考えています。私は、英語を教えるだけでなく、英語を通して、異文化やさまざまな意見や考えを知り、それらを受け入れる素地を養ってほしいと思っています。



インドのイベントについての英語掲示板

普段は、英語掲示板と英語の授業で異文化を紹介していますが、それだけで異文化について生徒た

ちが本当に理解できるかどうかは明確にはわかりません。しかし、ある時、生徒たちは理解できていた、ということを実感できたのです。

福井県では授業力向上のために、代表の ALT が提案授業を行います。そして、県内の ALT と県教育委員会の指導主事の先生方が、この提案授業を参観します。普段、ALT は助手として授業に関わりますが、この提案授業では ALT が授業の流れを考え、指導案を作成します。2017年2月に、提案授業を行う機会をいただきました。

私は2年生に提案授業を行い、重要な世界の問題について、生徒同士に英語で討論をさせることにしました。討論のテーマは、人種差別でした。特に、世界では黒人が受けている差別の1つに「ブラックフェイス」（黒塗りメイク）があります。そこで、授業では、日本のバラエティ番組でタレントが黒塗りメイクで黒人のように見せかけることで笑いをとったことと、アメリカ人が動画サイトに不適切な動画を投稿したことを比べ、生徒たちに意見交換をさせたり、参観している ALT の意見を聞いたりしました。なぜ黒塗りメイクは笑い事で問題としては扱われず、外国人が日本で悪ふざけをすることは問題になるのでしょうか。

さまざまな意見交換がなされ、授業の終わりには、生徒たちは黒塗りメイクで笑いをとることは、人種差別につながるのだと理解できました。また、動画を投稿したアメリカ人については、他人の文化を尊敬する必要があったということも理解できました。難しいテーマで、生徒たちにとっては少しチャレンジングな授業でしたが、生徒たちの真剣に考えている姿に感動しましたし、私自身学ぶことがありました。私の授業を通じて、本当の「国際交流」が行われたと感じました。

学校外では地域でボランティア

学校以外でも地域では、異文化理解を広めるような活動や、ボランティア活動をしています。大学時代、フードバンクでのボランティアや、路上生活者のためにサンドウィッチを作るボランティアなど、さまざまなボランティア



孤児院の子どもたちとのハロウィンイベント

活動をしてきたので、福井県でも続けようと思っていました。

私は、福井県での2年目に、福井県の AJET 役員会 (FJET) のボランティア活動の部長になり、主



孤児院でのりんご飴づくり

に孤児院訪問を担当しています。英語の「Orphan」と日本語の「孤児」を比べると意味が少し違います。英語で「Orphan」というと「両親がいない子ども」になりますが、日本で孤児院にいるほとんどの子どもは両親がいます。多くの場合、親の育児放棄や、貧困が原因で、親元で生活することが安全ではないという子どもたちがそこで生活しているのです。

私は JET ボランティアと一緒に孤児院に行き、子どもと遊んだり、一緒に料理をしたり、文化交流の活動をしたりします。訪問を続けた4年間で、幼児から小学生、中学生から高校生になったり、または、両親のもとへ戻ったりと、私の目の前で子どもたちが育っていきました。彼らの成長を見られることが何よりも嬉しいことです。

今後、福井県での思い出とともに

JET プログラムに参加した4年間、色々な活動を通して、私自身、大きく成長でき、感謝しています。今年、福井県を離れますが、日本国内だけでなく海外にも福井県のことを広める活動を続けたいと思っています。そして、また新たに福井県にやってくる誰かに、私のようにたくさんの思い出を作ってほしいと思っています。これからも地域のコミュニティと協力し活動することや異文化を理解することの大切さを広めていきたいです。

プロフィール



Natasha Taliferro

アメリカのバージニア州出身。2015年上智大学に留学。2016年アメリカのジョージ・メソン大学卒業。卒業後、福井県で外国語指導助手として4年間勤務。主に中学校で指導にあたる。JET プログラム終了後、日本で国際関係の職に就く予定。